



長谷川 集平さんの絵本

校長 田中 俊光

1955年(昭和30年)6月頃から主に西日本を中心としてヒ素の混入した粉ミルクを飲用した乳幼児に多数の死者、中毒患者を出した毒物混入事件が起きました。今回の校長室だよりでは、その被害者である長谷川 集平さんの絵本「はせがわくん きらいや」を紹介します。ここで出てくる「はせがわくん」は、作者 長谷川 集平さん本人です。

「はせがわくん きらいや」 長谷川集平

この前なんか、ひどかったんや。

ぼくら日曜日に^{ひろみねさん}広峰山に登ろうとったら、長谷川くんが「ぼくも連れてって。」ゆうんや。「あかんあかん、君へたってまうで。」ゆうたら、泣きだしよんねん。よっちゃんが、「かわいそうや。つれてったろや。」ゆうて、まあしょうがないから、連れてったることにしたんや。

日曜日の朝から山へ登った。十分も歩かへんうちに、長谷川くん、まっ青な顔して汗びっしょりなんや。

「しんどいんか。」ゆうて聞いたら、へなへなへたってしもた。

おかげでぼくら、こうたいで、長谷川くんおんぶして登ったんやけど、途中で雨がふってきて、めちゃくちゃやった。

ぼくは、はせがわくんが、きらいです。はせがわくんと、いたら、おもしろくないです。なにしてもへたやし、かっこわるいです。はなたらすし、はあ(歯)、がたがたやし、てえ(手)とあし(脚)ひよろひよろやし、めえ(目)どこむいとんかわからへん。

幼稚園のとき長谷川くんは来たんや。乳母車^{うばぐるま}に乗せてもろて来たから、みんな「赤ちゃんみたいや。」ゆうて笑ろてもたで。

先生が「長谷川くん、からだ弱いから大事にしてあげてね。」ゆうた。

ぼくは、とんぼをとってあげた。

長谷川くん「とんぼ、いらん。」ゆうた。

「なんでや。」

「虫は、きらいや。」

「女みたいやなあおまえ。」

そないゆうたら長谷川くん泣いてしもた。

頭にきて「泣くな」ゆうてなぐってやったんや。

小学校にはいってから長谷川くんはピアノを習いはじめたんや。

長谷川くんピアノはへたやけど、ピアノ弾いとう時がいちばん楽しそうや。

女みたいやなあ、ほんまに。

「あの子、けんかしても泣かされてばかりやからピアノで勝つんやゆうて習いよんよ。」と、おばちゃんがゆうた。

おばちゃんのゆうことよう、わからへんわ。

「おばちゃんのゆうことようわからへんわ。なあおばちゃん、なんで長谷川くんあんなにめちゃくちゃなんや。」ゆうたら、おばちゃんは、ため息をついた。

「あのね、あの子は、赤ちゃんの時ヒ素という毒のはいったミルク飲んだの。それから、体、こわしてしもたのよ。」

「でもあの子元気な方なの。もっとひどい人や死んだ人もぎょうさんおってんよ。」

「おばちゃんのゆうこと、ようわからへんわ。なんで、そんなミルク飲ませたんや。おばちゃんのゆうこと、わからへん。」

「そうやろね。そやけどあの子と仲ようしてやってね。」ゆうて、おばちゃんはキャンデーくれたった。そやから山もいっしょに連れてったる気になったんやで。

長谷川くんきらいや。せっかくぼくら仲ようしたりようのに。野球のときもゆるい球なげてもらいよんやで。そやのに三振ばかりや。ぜんぜん勝てへんやんか。頭にくるやんか。

長谷川くんもっと早うに走ってみいな。長谷川くん泣かんとときいな。長谷川くんわろうてみいな。長谷川くんもっと太りいな。長谷川くん、ごはん、ぎょうさん食べようか。長谷川くんたいじょうぶか。長谷川くん。

長谷川くんといっしょにおったら、しんどうてかなわんわ。

長谷川くんなんかきらいや。大だいだいだいだあいきらい。

〈あとがき〉

昭和30年、森永乳業徳島工場で製造されたドライミルクに含まれていたヒ素によって、西日本中心に2万人以上（推定）の乳児が身体に異常をきたし、125人（昭和30年当時）の赤ちゃんが死亡しました。そして現在も政府の認定患者、未確認患者数多くの人々が苦しみ、そして、亡くなっています。

私は、昭和30年4月兵庫県姫路市に生まれ、母乳が出なかったため、このヒ素ミルクを三缶飲んでいました。母が、事件を知り、断腸の思いで母乳にきりかえ、現在私は20才をむかえて健康にありますが、生まれつきのほそいからだ、やはりこのモリナガぬきに今の私は語れません。

私は、私の幼少のときのこと、貧しい母子家庭に育った旧友のA君のこと、病弱で、しかし、のきなないやつだったけど、友だちになってまもなく死んでしまったT君のこと、それからR君、N君…それから、この夏、学童保育クラブでバイトした時知った子どもたちを思い出しながらこの本を書きました。

ぼくは、ちいさいころ（今より）よわみそやった。

（昭和50年10月 集平）

〈森永ヒ素ミルク中毒事件〉

1955年（昭和30年）6月頃から主に西日本を中心として起きた、ヒ素の混入した森永乳業製の粉ミルクを飲用した乳幼児に多数の死者、中毒患者を出した毒物混入事件である。

日本では食品添加物の安全性や粉ミルクの是非などの問題で、2017年現在でも消費者の権利として引き合いに出される事例となっている。また、食の安全性が問われた日本で起きた事件の第1号としてもしばしば言及されている。

森永乳業は、1953年（昭和28年）頃から全国の工場で酸化の進んだ乳製品の凝固を防ぎ溶解度を高めるための安定剤として、第二リン酸ソーダ（ Na_2HPO_4 ）を粉ミルクに添加していた。試験段階では純度の高い試薬1級の製品を使用していたものの、本格導入時には安価であるという理由から純度の低い工業用に切り替えられていた。

1955年（昭和30年）に徳島工場（徳島県名西郡石井町）が製造した缶入りの粉ミルク（代用乳）「森永ドライミルク」の製造過程で用いられた「第二リン酸ソーダ」に、多量のヒ素が含まれていたため、これを飲んだ1万3千名もの乳児がヒ素中毒になり、130名以上の中毒による死亡者も出た。

この時使用された「第二リン酸ソーダ」と称する物質は、第二リン酸ソーダとは似て非なる物であり、元々は日本軽金属がボーキサイトからアルミナを製造する過程で輸送管に付着した副産物（廃棄物）で、低純度のリン酸ソーダ（ Na_3PO_4 ）であり、これに多量のヒ素が混入していた。この副産物が複数の企業を経た後に、松野製薬（「製薬」の商号があるが医薬品ではなく工業用薬品のメーカーだったことが明らかになっている）に渡り脱色精製され、「第二リン酸ソーダ」として販売され、森永乳業へ納入された。（ウィキペディア）